

---

# 英雄の帰還

懐中時計

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄の帰還

### 【Nコード】

N7380S

### 【作者名】

懐中時計

### 【あらすじ】

世界中で人気のMMORPG“キングダム”。彼の分身である“ヘイル”は有名なプレイヤーで、その日も仲間との“キングダム”ライフを楽しんでいた。ログアウトして眠りに就いた彼が、目を覚まして次に目にしたのは見も知らぬ木の天井だった。――――  
――MMORPGモノ。と見せかけて普通の異世界トリップだったりちょっと違ったり。 ※更新は三月、四月に再開予定。

## 第1話 **MMORPG“キングダム”**（前書き）

二作目。MMORPGの世界に云々。  
人気ジャンルって書きたくなるよね。

夢幻転生記に筆が乗らない時にちまちま更新します。

## 第1話 MMORPG “キングダム”

“キングダム”

日本語に訳せば“王国”。単純が故に、最大の特徴を表すその名を冠するゲームは人気の国産MMORPGだ。

サービス開始から五年経った今では世界中で多くの人が遊ぶ、最も有名なMMORPGタイトルの一つになっていた。

このMMORPGの世界“アスガイア”はほぼ同規模の二大陸を有していた。

その広大な大陸は、端から端まで進むのに現実時間の二日近くを費やさねばならなかった。移動速度を三倍にする馬を使って、だ。

これは“途中の休憩などを度外視して全ての時間を移動に費やす”ことを前提にした時間であり、現実の二時間がゲーム内時間の一日であることから、そのマップの広大さが分かるだろうか。

その他にも美しいグラフィック、豊富なやり込み要素、高機能なAI、多彩なイベントなどなど、基本的な部分も他のMMORPGと一線を画していたが、このゲームの目玉は何と言っても“国が作れること”だった。

このゲームのその広大な土地の割には初期配置のどの国の領地にもなっていない部分がほとんどで、世界に点在する村や街も極端に少なかった。

それはこのゲームが“プレイヤーがゲームを作る”ことを目的としていたためである。

レベルキャップは300だったが、20レベルに達した者はまず小さな小さな“村”を作ることが出来る。ただ、それは村と言うよりも部族やキャラバンに近いような代物なのだが。

50レベルになるとどこか一カ所に確かな“村”を作ることができた。これは一生そこから離れる事が出来ない訳ではなく、一定の予算があれば村ごと移動することが出来る。

10レベル単位で作れる村の最大規模が上がっていき、150レベルでは防壁を持つ“街”を作る事が出来る様になる。

そして、300レベル。そこまで至った者は全プレイヤー人口の内の一割未満だが、ここでついに“街”の数倍の規模を持つ“都”みやこと“国”を造ることが出来るようになる。

“都”は300レベルに達した者ならば誰でも造る事が出来る。しかし“国”を造るのには、三つの条件があった。

一つは300レベルであるという条件。

一つはある物を所持していることが条件だった。

それは各サーバの各職業毎にただ一つずつ存在する限定装備、“宝具”。

例えば“聖騎士”と呼ばれる二次職業があるが、“宝具”を手に入れる事が出来るのは、そのサーバーに存在する数ある聖騎士の内の一たった一人だけ、ということだ。

世界のどこかにある各最難関ダンジョンの最深部に安置されている“宝具”。

五年経った今でも、それを手に入れた者は数えるほどしか居ない。

そんな希少で貴重な限定装備を持つ者が、本人も合わせて五人以上メンバーの居る“ギルド”に所属し、そのギルドマスターを務めている事。それが最後の条件だった。

そして、“キングダム”の日本サーバーにあるギルドの一つ“英雄の右腕”は、そんな“国”の建国条件を満たし、今まさに新たな“国”を造っているところだ。

『ユフィ姐、城のモデリング終わったー？』

『うんにゃ今衣装やってるところ』

『りょーかい』

『ヘイルの方は』

『城下町の形はだいたい、あとは九龍がやってる』

『ういー』

ユフィ姐に確認を取ると、次は誰の作業状況を確認しようかとリストに表示される名前を見る。

ユフィ姐こと、300レベルのエルフ、魔導師のユフィーティアは俺がギルドマスターを務める“英雄の右腕”のメンバーの一人。  
“英雄の右腕”は国を造る条件である“五人以上のメンバー”をギリギリ満たしているたった五人だけのギルドだ。

ただしこの五人は国を造る為だけに協力しているのではなく、“キングダム”のサービス開始初期からずっと一緒にパーティーを組んでいる。

普通のログイン時間もほぼ同じで、趣味も合う、気の良い仲間達だった。

“英雄の右腕”は、様々な意味で有名なギルドだった。中堅以上のプレイヤーならば誰もがその名を知っているほどに。

最古参のギルドなのに、メンバーが五人しか居ない。なのに、その五人全員が“300レベル”であること。さらには、五人全員が“宝具”保持者であること。

最古参のギルドとなればメンバーが百人を超えるのは普通だったし、中には千人単位のギルドもいくつかある。

しかし結成当初から五人以外の誰もメンバーを増やさずにここまですったギルドは他に無いだろう。

そして少人数ながら、その全員が300レベルというのは中々目を引くものがある。

しかしこれだけならば“珍しい”程度で済むだろうし、ここまで有名になることも無かっただろう。

“英雄の右腕”が有名になった要因は宝具にある。

その希少さ故に、宝具がもたらす効果は絶大だった。

宝具は武器と防具の二つが対になって存在するが、その武器には“全ステータス一割上昇”という効果が全ての宝具に付与されている。

それに加えて、それぞれの職業に特化した効果が付随する。

例えば“聖騎士”ならばSTR（筋力）とVIT（生命力）の二割上昇。対魔物の際の与ダメージ二割増。

加えて全ての防具には全状態異常の回避率と耐性の九割上昇。

そこに“聖騎士”に特化した効果である、被物理ダメージの五割減、被魔法ダメージの三割減。回復魔法、回復薬、自然回復の効果三割増。

その他諸々細かい効果があるが、大きな物だけでもこれほどの恩恵が宝具にはあった。

このように限定装備がバランスブレイカーと呼ばれても仕方ないほどの力を秘めていたおかげで、その保持者がギルドにいると言うだけで、そのギルドとその保持者の名前はサーバー中に広まる。

戦争イベントなどではまさに百人力だし、ダンジョンを攻略するにも、保持者が一人いるだけでグンと楽になるからだ。

それだけに宝具の入手は困難を極めるのだが、それに見合う恩恵を受ける事が出来た。

そして“英雄の右腕”が有名になったもう一つの要因。

それは人間族専用の職業である“英雄”。

初期選択である一次職業の一つで、これにだけは二次職業が存在しない。

人間族の特徴として、ステータスが平均的であり、どんな職業もそつなくこなすことが出来、なおかつ他種族よりも成長が早いことで知られる。



事実、“キングダム”の300レベルのプレイヤーのほとんどは人間族である。

しかしこの英雄という職だけは例外で、一番成長の遅い事で知られる竜人族よりもさらに成長が遅くなる。

加えてステータスの成長率が著しく低く、一応前衛職であるにも関わらず、50レベルの英雄と40レベルの戦士のSTRが同じという悲劇。

そのためにその名の響きに反して人気は全く無く、大きな街に一人居るか居ないかという有様だった。

それでも“英雄”には絶対に何かあるはずだと信じて使い続けたのが、ユフィ姐に“ヘイル”と呼ばれた俺。

“英雄の右腕”のギルドマスターであり、“キングダム”で唯一の300レベルの“英雄”。

諦めずに英雄を使い続け、ある事に気づいたのは250レベルを過ぎたあたり。

ステータスが異常に伸び始めたのだ。

英雄は全てのステータスが平均的に伸びる。自由に割り振れるポイントもあるにはあるが、それまではそのポイントも微々たる物だった。

しかし290レベルになると、全てのステータスが、そのステータ스에特化した職業から一步引いた程度になっていた。

レベルキャップである300レベルに達した時、その能力はまさに“英雄”に相応しいモノになっていた。

超一流とは行かないまでも、その全てが一流の数値を示していたのだ。

ただそのままでは突出した能力が無く、他の300レベルに“器用貧乏”と言われかねなかった英雄だが、それを“万能”に変えたのが宝具だった。

英雄専用の西洋剣型武器“キャリバーン”。  
全ステータスの三割上昇。全与ダメージ三割増。対魔物の際はさらに三割増。

英雄専用の指輪型防具“アンリヴァル”。  
全被ダメージ五割減。体力、魔力の自然回復速度の五倍化。魔法詠唱速度の倍化。

その他細かい能力上昇等、英雄限定装備が持つ能力は、他の宝具と比べても一段と飛び抜けていた。  
その最強の装備を手に入れた俺は“最弱”という英雄職の汚名を返上し、名実共に“英雄”となったのだ。

ただまあ飽くまでもゲームの話なのだが、それまでの苦労に見合う達成感があった、と思う。  
実際レベルキャップに達した今でも狩りは楽しいし、国を造るという一大事業を仲間と協力しながら進める今は至福の一時だ。

ただ、もしこのゲーム内の“ヘイル”が自分自身で、実際に魔法を使えたりしたら——なんて考えるのだが、詮無き事か。

ともかく今はユフィ姐と九龍以外のギルドメンバー、ロイとケフイアに連絡を取らないといけない。

ユフィ姐——もといユフィーティアは先に述べたように、エルフ族の魔導師。

他のメンバーも大差は無いのだが、俺の一番古いフレンドだ。何となく話し方が投げやりな感じだったり、やる事が大ざっぱだったりするが、気に入った事や興味のある事には人一倍のめり込むし努力する。

国と都の要になる王城のモデリングを任せているのもその為だ。

九龍は獣人族の侍。五人の中で一番早く300レベルに到達した。普段は冷静沈着でパーティーの参謀的な役所に居るのだが、誰かが下ネタを言うとすぐに食らいついてくる。たぶん童貞。

ロイは竜人族の聖騎士で、俺を除く四人の中では一番成長が遅かった。

性格は気さくで、ギルドメンバー以外にもフレンドはたくさん居たようだ。“英雄の右腕”のムードメーカー。

そしてケフィア。半精霊族の大司祭。

名前を見たとき、白いナニかを意識したんじゃないかと疑ってしまい、何となく胡散臭く思ったのだが、やっぱりこいつが一番の曲者だった。たぶん名前はワザとだろう。

出会った当初は礼儀正しく敬語を使ってくれていたのに、一ヶ月ほど経つと徐々に本性を現していった。

九龍が下ネタ好きだと知ると、戦闘の最中に男の幻想をぶち壊す様なセルフガールズトークを連発したり。『女王様と呼べ』とか言

って、従わないと回復魔法を掛けてくれなくなったり。  
とにかく酷かった。

しかし重要な戦闘となると一変、その能力を遺憾なく発揮した。  
新たなダンジョンに挑む時は独自に下調べをして情報を集めてく  
れた。厳しい戦闘でも的確に最良のタイミングで回復魔法をかけて、  
決してメンバーを死なせなかった。戦争イベントの際は九龍と一緒に  
参謀役を務め、上手く敵を誘導して倍近い戦力を持った敵国を喰  
い破った。

何とも個性豊かな仲間達だが、それだけに充実したゲームライフ  
を送っている。

と、物思いに耽ってロイとケフィアに連絡を取るのを忘れていた。  
ケフィアはまだログインしていないようなので、建物の建設作業  
に当たっている筈のロイにチャットで話しかける。

『ロイおっすー』

『おっすーどした？』

『作業進んでるかなって』

『ぼちぼち。あと、ちょっとオーク材足んない』

『採ってこようか？』

『頼むー』

『うい』

軽く現状を確認したところで、オーク材の取れる森林に向かう。  
ただこの“王都ヴァーミリオン”建設予定地は、森や山から離れ  
た平地に建てられているため、少々遠出しなければならぬ。

正直めんどい。

しかし建材が無ければ王都は出来ないし、引き受けた手前サボる事も憚<sup>はば</sup>られる。

仕方ないので“良質なオーク材”の採れる“マレロの森”に向かう。

ただ、大陸の南東に位置するマレロの森は、大陸の西側にある王都ヴァーミリオン建設地とは大きく離れている。

なので転移魔法を使って近くの街まで飛んで時間短縮をする。

村・街・都の一覧を確認すると、幸いすぐ近くに知り合いの街があるようだ。

スキル欄から“転移”を選び、その街を選択。

すると景色が反転、一瞬で人が溢れる賑やかな街の門が目の前に現れるが、俺はその門には目もくれずに右へ進み、巨大な森林へと足を踏み入れた。

“マレロの森”は当然の如くモンスターが出現するが、そのレベルは低く、20レベル程度のものがほとんどだ。30レベルもあれば一人でも安全に戦える。

到底300レベルの相手では無い。

まあ、それ以前にモンスターが攻撃を仕掛けて来ないのだけど。

いくら一撃で倒せると言っても立ちはだかるモンスターが邪魔な事には変わらない。

その分モンスターがモーゼを前にした水の如く、道を空けてくれるのが楽だった。

二十分ほど歩くと周りに生える木の種類が変わってくる。

入り口付近は採取しても建材には転用出来ない木しか生えていなかったが、この辺りはグラフィック的にも太い木が群生しており、採取すると“良質なオーク材”が手に入った。

そのまま一時間ほど採取を続け、アイテムボックスの半分程が“良質なオーク材”で埋まった。

中には“高級なオーク材”なんかが混じっているが、確か高ランクの建物を建てるのに必要だったはず。無駄にはならないだろう。

そろそろ帰ろうかと思い、スキル欄の“転移”にカーソルを合わせると同時に、メッセージが届く。

差出人はユフィ姐。

『王城完成したよん

あと九龍とロイが用事で落ちるって言ってたからオーク材はゆっくりでいいよー』

どうやら少々遅かったようだ。ふと画面から目を離し、時計を見ると既に深夜の二時を回っていた。

仕方ない。切りも良いので、フィールドでの安全なログアウトに必要な“キャンプセット”というアイテムを使い、ゲームから落ちる。

「んー……、そろそろ寝るかな……」

一度ぐつと伸びをする。長時間座っていたせいで体がだるい。もうお風呂は済ませてあるのであとは寝るだけだ。

パソコンの電源を落とし、ぼふりとベッドに飛び込む。昨日干したばかりの布団はその柔らかさを取り戻していた。ふかふかしていて気持ちが良い。

さて少しだけ体を起こし、天井から下がっていた紐を二度引くと、部屋を照らしていた蛍光灯から光が消える。

再び上体を倒し、静かに目を閉じる。

何故だろうか、いつもと同じ時間のはずなのに、酷く眠い。体に血液以外の何かが巡っている様な違和感。

もうすぐ国が完成するせいで気持ちが昂ぶっているのだろうか。

恐らく明日には出来上がるだろう王都ヴァーミリオンの姿を想像して、思わず口元がにやけてしまう。

「明日、楽しみだな……」

そう呟いた瞬間、俺はすでに意識を手放していた――――

## 第2話 見知らぬ天井

「……は？」

素っ頓狂な声が部屋に響く。声の主は間違いなく自分。

「いや、待て待て。昨日……え？」

分からない。一体全体どうなってやがる。

自分が寝ていたベッドは確か黒く塗装されていて、青いシートと薄いグリーンの枕があったはずだ。

少しくすんではいるが、白いタオルと茶色い何かの毛皮を体に掛けて寝ていた記憶は無い。

壁は見慣れた白い壁紙ではなく、切り出した跡の残る丸太。天井も同じような物で、決してここが毎日寝起きしている自分の部屋では無い事を確信させる。

まるでよくキャンプ地にあるような木製のロッジ。いや、それよりも何段も前時代的な作りだ。

申し訳程度に壁に空けられた窓のような複数の大きな穴には、虫除けだろうか、目の細かい網が張られていた。

その窓から見える外の景色は決して現代の住宅街ではなく、恐らくこの部屋のある家とほぼ同様に作られたであろう木製の家々と、その向こうに広がる森林地帯だけだった。



「はあ……」

思わず溜め息を吐いてしまう。

一欠片の希望をこめて頬を抓るが、その行動の結果として導き出された答えは“これが夢ではない”と言う非情なものだった。

しかし“夢ではない”だけで“いつもの日常ではない”可能性も否定は出来ない。

馬鹿馬鹿しいが、もしかすると“闇の組織に連れ去られて人里離れた場所に監禁されて人体実験をされた”可能性もある。

少なくとも“いつもプレイしていたMMORPGの世界に転移した”という可能性よりは。

そう思う、いやそう思いたいが、この目の前に浮かぶウィンドウは何なんだろう。

そのアイテムウィンドウに並ぶ数々の装備品や消費アイテム、大量のポーション。そしてアイテム欄の半分を埋める大量の“良質なオーク材”と来たもんだ。

これは寝る直前までプレイしていた“キングダム”の状態と一致する。

ものは試しと、ポーションを一つアイテム欄から“取り出した”。するとフラスコのような形の入れ物に入っている、赤い色をしたHPポーションが手のひらに現れる。透明なキャップで閉じられた口は少し広く、飲みやすいように先は丸まっていた。

少々勇気は要ったが、飲んでみると意外と喉越しは良く、味も悪くは無かった。

飲んですぐに効果は現れ始め、少々だるかった体からは違和感が無くなり、思考も急にハッキリしてきた。

「……ちよつと待てよ。ポーションを“取り出した”？ 一体どうやって……」

ふと頭に浮かんだ疑問。

アイテムウィンドウがそこにあるのは間違いない。目に見えているのだから。

問題は一体どうやったか。

さっきはごく自然にポーションを取り出すように念じたが、何故その取り出し方を知っていたのか。

空中のアイテム欄を手で触ってみるが何も起きない。

「……まるで、元から“知っていた”かのような——っ！」

瞬間、頭に走る鋭い痛み。その痛みはまるで脳を掻き乱すかのよう  
に頭全体を駆け巡る。

とっさに頭を抑えつけるが痛みが止むことはない。

あまりの痛みに瞬きすら出来ず、身体を動かす事などお出来ない。  
い。

身体が震える。呼吸が乱れる。

脳裏に浮かぶのは“誰か”の記憶。

映像が次々と頭に流れ込んで——いや、違う。どこからか“湧き出てくる”。

“誰か”は魔物を狩っていた。

“誰か”は仲間と冒険をしていた。

“誰か”は談笑しながら酒を飲んでいた。

“誰か”は強大な敵と戦っていた。

“誰か”は仲間と、国を——

「——！——！　ねえ！　大丈夫！？　ねえ！」

その声にハッと顔を上げる。

痛みは止んでいた。

さっきの名残か、今だに鈍い痛みはあるが身体を動かす事は出来るようになっていた。

「あ、ああ……。何とか……」

険しい表情をしていた目の前の彼女の顔が、安堵した様に緩む。

「そう、良かった……。様子を見に来たら、凄く苦しんでるみたいで心配したよ」

そう言って微笑む赤眼の少女。くりっとした大きな目に小さな顔。そのあどけなさの残る可愛らしい容貌と150から160センチ程度の身長からすると、まだ成人はしてないだろうが16歳程度だと推測出来る。

ミディアムぐらいの茶色い髪は毛先がほんの少しカールしており、

その小さい顔に良く似合っていた。

しかし頭の髪の中からは、おおそ地球では“コスプレ”をしている人にしか見かけない物がピヨコンと生えていた。

「犬耳……」

そう呟いた自分の声には、確かな驚愕の色が混じっていた。  
その声が聞こえたのか、少女はピクリとその犬耳を動かす。

「あのさ、一つ……聞いていい？」

「え、あ、はい」

「……君は獣人族？」

「！ え、あ、その……」

何故かその少女の表情が僅かに曇る。どこか心細げに、そして不安げに見える。

「……はい」

「そっか……」

ふう、と溜息を吐く。

俺が何かの瞞しまやかに掛かっていたり、何か思い違いをしていなければ、どうやら先ほどの湧き出てきた記憶は本物のようだ。

そして目の前の少女が、地球ならば現代人の妄想の産物に過ぎなかった“獣人”という存在であることも、どうやら現実。

そして、俺が“ヘイル”で、ここが“キングダム”の舞台である

“アスガイア”だということも、きっと本当の事なのだろう。

### 第3話 記憶と今

「あの……」

「ん？」

どこか遠慮がちに話かけてくる獣人族の少女。

先ほどとは違い、何故かこちらの顔を見ようとしなかった。

「お父さんとお母さんが……目が覚めたら呼んで来なさいって」

なるほど。向こうにしてみれば得体の知れない人物だからな。

先ほどの記憶には“ヘイル”の過去の全てが記録されていた。

その殆どは俺が“ヘイル”を操作し、“キングダム”で歩んだ道のりと同じ物だった。

強いて違う部分があるとすれば、ユフィ姐や九龍、ロイやケフィアが直接声を発していたこと。

そして元々の世界でしか通じない様な会話の記憶は無かった事。例えばロイと話した、浅草の料理の美味しい店の話なんかは記憶に入っていなかった。

そして唯一、俺の元々の記憶に無かった部分。

それは俺がマレロの森でログアウトした後の記憶。

ベタか話だとは思うが、どうやら“ヘイル”は一人で魔王なる存在と戦っていたらしい。

マレロの森でキャンプを張った後、急に浮遊感を感じたかと思うと、次の瞬間には何処かの毒々しい雰囲気の城の中に居た。

そして目の前には魔王を名乗る魔物。

自慢気に話す内容からすると、力ある者をそうして転移させ、順に一人ずつ殺していき、最後にアスガイアを侵略する算段らしかった。

記念すべきその最初の犠牲者がヘイルだった訳だ。

しかし幸か不幸か、いや魔王にとっては不幸だったのだろう。

相手が前衛職ならば配下の大量の魔物に魔法を使わせて追い込んだだろう。

相手が後衛職ならば数に物を言わせて魔力（MP）切れを狙っただろう。

しかし呼び出した相手はヘイルだった。

物理攻撃と魔法攻撃の両方が最高レベルで、さらには宝具“アンリヴァル”の効果でダメージが大幅に削られていたし、自然回復力が五倍になっていた。ヘイルには波状攻撃も物量作戦も意味を成さなかった訳だ。

結局魔王は自らの策が自らを滅ぼす事になり、ヘイルによってその野望は人知れず潰<sup>つぶ</sup>える事となったのだ。

しかしその魔王は絶命の際、城ごと消滅する仕掛けを施していた様で、その余波を受けてヘイルは長い長い間異次元空間をさ迷っていたらしい。

と、まあ何ともゲームに出て来そうなストーリーだが、どうにも腑に落ちない点がある。

ただし大前提として、ここが“キングダム”の中だとしての話だ  
が。

まず“キングダム”には“魔王”なんていう敵は存在しなかった  
点。

そもそも“キングダム”は、村や街、国単位の戦争とそこでの対  
人戦闘が一番の特徴だった。

勿論300レベルまで育て上げるのに必要な高レベルモンスター  
は居たし、それらが配置されたダンジョンもあった。

しかし俺が最後にログアウトするまで魔王というものは実装され  
ていなかった筈だ。

二つ目はウィンドウのタブが消えている事。メッセージタブやお  
知らせタブ、システムタブといった物が無くなっていた。

残っているのはアイテム、そしてステータスの欄のみだ。

ここで最後の疑問。

ステータスの項目を開くと、何故かレベルが“302”になって  
いた事。

それは“キングダム”では決して有り得ない数字だった。

加えてそれに合わせてSTR（筋力）・VIT（生命力）・DE  
X（器用さ）・AGI（俊敏さ）・INT（知力）・MIN（精神



力)の各ステータスが上昇していた事。

詳しく言えば、300レベル時点では全ステータスが900という数値を示していたのが、今では1020になっていた。

この数値は驚異的だ。

確かに“英雄”の300レベル直前のステータスの伸びは凄まじかったが、たった2レベルで全ステータスが120も伸びているのは俄かには信じがたい光景だった。120×6で合計720ポイントも伸びているのだから。

これは“英雄”以外の普通の人間族ならば60〜70レベルの上昇が必要な量だ。

何より“キングダム”では各ステータスの限界数値は1000だった。

そしてどんな育て方をしても全ステータスを1000にする事は、取得出来るポイントの関係で絶対に不可能だった。

それが今、こうして目の前で覆されている。

分からない。ここは“キングダム”の中じゃないのか？

もしも違うのならば、一体ここは何処なんだ。

……いくら考えても答えは出ないか。

ともかく、今はやれることをしよう。そしてこの世界を歩いてみよう。

これが夢物語ならばそれも良い。

一番避けるべきなのは『これを夢だと思い込んで、本当に現実だった場合』だ。

どうせ夢だからと無茶をして、愚かな結末を迎える事は避けたい。ならば最初からこれが現実だと認識しておいて行動する。それが最善手だろう。

「ああ、分かった。すぐに行くよ」

そう言ってベッドから起き上がり、すぐ横に置かれていた靴を履く。

それが終わると、少女が先導するように歩き始める。

“ヘイル”の記憶から大分時間が経っている可能性もある。まずは世界の状況を聞いてみるか。

「おや、もう大丈夫なのかね？」

「あ、はい。おかげさまで」

「そうか、それは良かった。これはあまり上等ではないが、良ければ飲んでくれ」

そう言って目の前に陶器のコップに入ったお茶を出してくれる。色は少々薄いが、ほうじ茶のような香りがして気分が落ち着く。

「あ、おいしい」

思わずそう口にすると、目の前の男性の顔が僅かに綻ぶ。  
先ほどの少女と同じ茶色い髪と赤い眼は親子の証だろう。  
何よりその頭に生える一对の犬耳が、言外にそうだと示していた。

「これはこの周辺に生える野草を煮詰めた物だね。野草と言うと聞こえは悪いが、物を選べば案外美味しい物なんだ」

どうやら栽培したりしている訳では無いらしい。

「へえ、元手がタダなんですね……。街で露店でも開けばボロ儲けなんじゃないですか？」

それはとっさに出た言葉だった。  
悪気なんて一切無かった。

「……それは嫌味かい？」

だからその言葉の意味が分からなかった。  
ただ、彼の笑みが一切消えたその厳しい表情から、先ほどの言葉が冗談などでは無い事が容易に感じ取れた。

「……そういえばまだ聞いていなかったな。お前はあそこで何をしていたんだ？」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

本当に意味が分からない。どうしてあれが嫌味になるんだ？

「あの、先にお聞きしたいんですが、今は一体何年の何月何日です

か？」

“キングダム”は地球と同じ時間設定で、1年が12月365日、1日24時間だった筈だ。

そして“ヘイル”の記憶の最後では天上歴702年5月12日だった。少なくとも1年は経っていそうだが――

「……おかしい事を聞くんだな。今は997年9月3日だ」

――事態は思ったよりも深刻な様だ。

## 第4話 獣人の少女とその家族

997年。つまり702年から295年が経っている計算になる。それはあらゆる物が変化するのに十分すぎる時間だった。日本で最も長く続いた幕府である江戸幕府でさえ、出来てから265年で滅んだのだから。

つまりこの“ヘイル”の記憶は相当な時代遅れであり、役に立たない可能性が出てきた。無いよりはマシな程度かも知れない。

とすると、ここがアスガイアだとして、他のプレイヤーはどうなっているのだろう。

人間族や獣人族は寿命が普通は70年程度だから、残ってはいないだろう。

ならエルフ族やドワーフ族、竜人族や半精霊族はどうだろうか。

そもそもプレイヤーが残っているのかも分からない。情報が無さ過ぎる。

それに、恐らく新たな国が幾つも興っているだろう。

初期配置だったアルメタリア王国は残っているのだろうか。

そして“英雄の右腕”の国は今一体どうなっているのだろうか。

「……何を驚いているのかは知らないが、こちらの質問にまだ答えて貰っていない。あそこで何をしていた？」

どうやら考えるのに集中し過ぎたらしい。

獣人族の男性がさらに険しい顔をしている。

「すみません、もう一つだけ質問をさせてください。ここはマレロの森の中ですか？　そして“あそこ”とはマレロの森にある櫟の木に囲まれた、少し開けた場所の事ですか？」

おおよそ  
大凡の予想を付けて聞く。　部屋から見えた木々も櫟の木ばかりだったし、恐らく“あそこ”とは最後にキャンプを張った場所の事だろう。

「ああそうだ。……お前は何か目的があってあそこに来ていたんじゃないのか？」

やっぱりか。

魔王と戦い、異次元をさ迷って、元の場所に出る。

別におかしな話じゃない。もっとおかしな事が既に起こっているのだから、さして驚きはしない。

しかし、どう説明したものか。

「……なるほど。強力な魔物に追われて、逃げ着いた先があそこだったと」

「ええ、なぜマレロの森にあんな強力な魔物がいたのかは分かりませんが……」

今話しているのはでっち上げたストーリーだ。  
そして話している内に分かった事もある。

これは“ヘイル”の記憶にもあった事だが、この世界にはレベル概念があるらしい。

しかし、普通の人はレベルが上がってもどうやらポイントを割り振る事は出来ない様だ。

レベルが上がると例えば普段足を鍛えている人はAGI（俊敏さ）が上がりやすく、魔法をよく使う人はINT（知力）が上がりやすい。

それに加えてその人が“どんな風になりたいか”と考えている内容に依っても成長率は変わる。

種族ごとに成長し易いステータスも違うらしい。

しかし“ヘイル”の記憶では自由に割り振れるポイントは好きに割り振っていたし、記憶の中のユフィ姐達もそうしていた。

この辺も後々調べてみよう。

そして現在確認されている最高レベルは150レベルだと言うこと。

実際100レベルを超えている人は数えるほどしか居らず、それらは例外なく二つ名が与えられ、あらゆる地で最高級の待遇を受ける事が出来る。

一般人は精々10レベル程度らしく、この15レベルだと言う獣人族の男性はそれなりに高い方らしい。

勿論冒険者や軍人はもっと高レベルなのだと言っていたが、察するに精々30〜40レベル程度だろう。強い人で50かそこら。

そんなのでモンスター——ここでは魔物と言うらしいが、まともに戦えるのだろうか。

確か北の方には100レベル近い魔物もいた筈なのだが。

まあ話を聞く限り何とかやっているのだろう。

そしてマレロの森の辺りを治めている“クリステイン王国”は人間至上主義とでも言えば良いのか。とにかく人間族以外への風当たりが強かった。

街で獣人族やエルフ族が襲われても皆知らぬふりをし、犯人は罪にも問われないらしい。

それどころか奴隷の売買までが平然と行われていると言うのだから恐ろしい話だ。

当然人間族以外の者がこの国に寄り付く事はなく、逆に“そういう人間”が集まってしまったのがクリステイン王国だった。

ただ、クリステイン王国がこうなってしまったのは10年程前かららしく、それまでは善政が敷かれ、皆が住みやすい国だったらしい。

それもこれも陰では“愚王”と呼ばれるブリード・クリステインが原因らしいが、何とも迷惑な話だ。

おかげでこちらは人攫いか何かに間違えられていたのだから。

どうやらこの男性が陰しい顔をしていたのは、俺が獣人を攫いに来たんじゃないかと疑っていた為だった様だ。

獣人かと聞いた時に、あの少女が躊躇っていたのもそのせいだろう。



う。

今は何とか人攫いではないと信じてくれたようだが。

「しかしよく助けてくれましたね……。いや、俺は感謝してますし、ありがたいんですが……」

「ああ、それなんだがね。君を発見したのは娘なんだよ」

そう言って男性は少し気まずそうに苦笑する。

「木の実を取りに森へ入っていった筈の娘が、代わりに傷だらけの人間を持って帰って来たのには驚いたよ」

「それが……俺なんです」

「ああ。私はね、本音を言うとうと君を助けたくなかった。最近の人間には嫌な思い出しが無いかからね。しかし娘は頑として聞かなかった。『見捨てるなんて絶対に嫌だ』と言ってね」

獣人の男性は頭をガシガシと掻いて、お茶を一口啜<sup>すす</sup>る。

「良くも悪くも、あの子は世間を知らない。……発見したのが私だったなら、迷わず見捨てただろう。君には申し訳ないがね。しかし、今回に限っては……娘が発見者で良かったかも知れないな」

そう言っ、男性は右手を差し出す。

「私の名前はヴェスタ、見ての通り獣人だ。……暫く話してみたが、どうやら君は信用出来そう」

ヴェスタさんの顔を見れば、さっきまでそこにあったこちらを訝

しむ様な雰囲気は消えていた。

信用された事が少し嬉しくて、自然と破顔してしまう。

「俺は、ヘイル。よろしくお願いします」

差し出された手をしっかりと握る。

ただの握手だが、なんだかその手はとても温かかった。

「キイ。隠れてないで出てきなさい」

不意にヴェスタさんが、俺の後ろを見ながら呼び掛ける。

後ろを振り向けば、そこには半開きの扉に隠れながら、赤い瞳がこちらを伺っていた。

「ほらキイ。お父さんもああ言ってるわよ」

「ちょ、ちよつと待っ！」

何やら叫びながら扉から出てきた先ほどの少女と、母親らしき獣人の女性。

茶色の長い髪を首の横で一つに纏めて、体の前側に下ろしている。

瞳も少女と同じ赤色で、父母娘三人揃って同じ色だった。

まあ、家族全員が髪も瞳も同じ色なのは偶然だろう。

「あ、あの……」

キイと呼ばれた先ほどの少女が、チラチラとこちらを見ている。クルクルと両手の指先を回している姿が可愛らしい。

「わ、私、キイ、です」

俯きながら、恥ずかしそうに、けれど一生懸命に言葉を紡いでいた。

そんな様子を傍らの女性は楽しそうにクスクスと笑っている。

ヴェスタさんと話している間も視線は感じていた。誤解は解けていると思うので、俯いているのは性格故だろうか。

さっきは結構普通に接してくれていたと思うのだが。

「……あの、怪我は、大丈夫……ですか？」

「ん、ああ。もう大分良くなったよ。君が発見してくれたんだってね。俺はヘイル、ありがとう」

ずっと右手を差し出すと、キイは驚いた様子にくりっとした目をパチクリさせていた。

こちらの顔と右手を何度も交互に見返し、そしてまた顔を俯かせ、おずおずと右手を握ってくれる。

まあ、握られたのが人差し指の先っぽだけだったとしても、それはきつと握手なのだろう。

「ほんとにキイちゃんは可愛らしいわねえ……」

まだクスクスと笑っている少女の母親らしき人。

ずっと少女の前に出ると、迷わず右手を握られる。

「私はラキ、キイの母親よ。一応そのヴェスタの妻でもあるわ」

「ラキ、一応って……」

「あら、今はヘイルさんと話してるの。割って入らないでくれる？」  
「……はい」

俺を間に挟んで交わされる夫婦漫才。

二人は仲良いんだな。

落ち込むヴェスタさんと楽しそうに貶すラキさん。それをさつきとは打って変わって呆れた表情で見つめるキイという少女。

恐らくこの光景は日常茶飯事なんだろう。

ラキさんがヴェスタさんの頭を両手の拳でぐりぐりすれば、ヴェスタさんは何か叫びながら必死にラキさんの手を叩いている。

きっとこの少女が俺を助けてくれたのはこの家で育ったからなんだと、そう思った。

## 第5話 ある日、マレロの森の中（前編）

目覚めてから一日経った。

昨日はあの後、村長の家に挨拶に行く事になった。

どうやら俺の事は村中に広まっているらしく、途中見かけた人達は皆探るような視線を向けてきていた。

ヴェスタさん達が隣を歩いているのを見て幾らか安堵した様子だったが、それでもあまり信用されては居ない雰囲気だった。

村長はムームと名乗る老人の男性だった。

ヴェスタさんの話を聞いて、俺が人攫いではないと知ると心底安心した様だった。

だがやはりと言うか『この村に居る間は武器は預けてくれないか』と頼まれ、事前に用意しておいた短剣を渡した。

これはヴェスタさんにも事前に言われていた事なので素直に従った。

アイテムウィンドウから直接取り出すと驚かれるので、俺を発見した時に近くに落ちていたと言う麻袋に入れていた事にした。

それとなく聞くと、どうやら俺以外の人にはアイテムウィンドウは見えないらしかった。

皆、物を運ぶ時は袋に入れて持ち運びしている。

レベル概念はあるが、ウィンドウは見えない。

レベルに関しても、レベルは魔力を自分の体に流して調べるらしく、それは歩くことや寝ることと同じ位当たり前に出来る事らしい。

ただし他人のレベルを一方的に知ることは出来ない。

レベルを調べるには繊細な操作が必要な上に、無理に調べようとすると相手の体がそれを拒絶するからだ。

他人のレベルをちゃんと知るには専用の魔法具アイテムが必要らしく、それに関しても自分の意志でレベルを誤魔化す事が出来るらしい。

ただし、レベルを低い様には誤魔化せるが、高い様には誤魔化せない。

力を抑える事は出来るが、自分の限界以上の力を出す事は出来ないからだ。

ゲームとは違って面倒なものだ。

しかしそれはある意味、こちらにとっては都合が良かった。

あまりにも大きな力是要らない恐怖と誤解を生み出す。

“ヘイル”の記憶にあった時代と、今の時代の“普通”は全く異なっている。

だから俺は力を隠す事にした。

ヴェスタさん達には自分は30レベルだと伝え、念の為“戒めの指輪”と言う装備を着けている。

随分前にケフィアから貰った装備だが、自分のレベルとステータスを一時的に30%に抑える代わりに、取得経験値が1.5倍になる。

つまり実際は90レベルになる訳だが、何かあっても30レベル相当に力を加減すれば大丈夫だろう。

——昔はこれを装備して、皆に半寄生状態でレベル上げてたな。思い出すと、長い間さ迷っていた“ヘイル”の影響か、ほんの一年ほど前の事なのに酷く懐かしい。

現実での1年が“キングダム”での12年に相当するので、“ヘイル”の記憶ではそれも随分前の事だ。

……しかしそんなにも時間が経っているのにも拘わらず。

「うーん、やっぱ“キングダム”のヘイルだよなあ……」

宛がわれた村の空き家の一室で、姿見の前で自分の金髪を弄る。

170センチ台半ば、見た目18歳程度の彼。こちらを見つめる金色の瞳を宿す優男は、確かに“キングダム”のヘイルだ。

元々身に着けていた服はボロボロになっていたもので、今はヴェスタさんに貸して貰った麻で出来た物を着ている。

しかし“18歳の見た目”とはどういう事だ。

“キングダム”のサービス開始は5年前。つまり、“ヘイル”は少なくとも60年の時間を生きている筈で、それ相応に老けていてもおかしくない。

もしかしたら異次元をさ迷っていたのが原因かも知れないが、今は何も分からない。

「……疲れる」

見た目が“ヘイル”であった以上、自分が立てた仮説が段々と真実になりつつある。

しかし同時に疑問は増える一方だ。

ふう、と一度溜め息を吐く。

「……とりあえず、今はヴェスタさんに頼まれた仕事をしよう」

靴の紐を締め、忘れ物が無いことを確認する。

籠を背負って家の入口に向かう足取りは重かった。

「これも食べれるのかな？」

「そ、それは食べれます、が、あとで、み、三日間寝込む事に、なります」

「……うん、ダメだよねそれ」

キイチちゃんに聞くと恐ろしい言葉が返ってきた。“アンリヴァル”の効果で毒は殆ど効かないのだが、進んで食べたくはない。

手に持っていた椎茸のような物を横に投げ捨てる。

よく見れば、笠の裏には青い胞子が付着していた。うわあ。



隣に生えている小さいキノコは先ほども採った物と同じ種類だ。味が濃くて美味しいらしい。

その周りに生える細長い野草は昨日飲んだお茶にも入っているらしい。

採り過ぎないように注意しながら少しずつ摘んでいく。

キノコは腰の麻布袋へ。野草は背中の籠へ。

そうして暫く木の実やらキノコやらを採っていると、後ろで警戒していたヴェスタさんとラキさんが近寄ってくる気配がした。

「や、ご苦労様。ちょうど良い時間だしお昼にしないかい？」

後ろを振り返れば、そこには簡素な槍を持ったヴェスタさんと二本の短剣を腰に差したラキさんが居た。

そう、今日はマレロの森の中に食料を採りに来ていたのだ。

あの獣人族の村は、その国柄の為に外との交流が極端に少なかった。

その為基本的に自給自足の生活で、食料は畑で穫れる穀物や森で採れる野草や獣肉が主だった。

その野草採りを俺とキイチちゃんが行い、魔物や獣の警戒をヴェスタさんとラキさんが行っている。

勿論俺に武器は渡されていない。ヴェスタさん達は俺を信用してくれている様だが、念の為だろう。

「そうですね、流石に少し疲れてきましたし」

「決まりだ。南に綺麗な湧き水があるからそこで食べよう」

「ほら、キイも」

「はい」

キイちゃんはラキさんに呼ばれるとすつくと立ち上がり、茶色い髪をふわふわと揺らしながら小走りでこちらに近づいてくる。

「あ、キイちゃんもうそんなに集めたんだ」

「え？ あ、な、慣れてますから……」

「そっかあ。俺も結構頑張ったつもりなんだけどなあ……」

キイちゃんの籠を一瞥し、自分の籠に目をやる。

自分の籠は半分ほどしか埋まっていけないが、キイちゃんの物は野草や木の実で溢れていた。

腰に着けた麻袋も外から見ただけで分かるくらい、キノコで一杯になっている。

「だ、大丈夫ですよ！ 私なんか、初めての時は殆ど空だったんですから……」

そんなに暗い顔をしていたのだろうか。

必死に慰めてくれようとする様子がおかしくて、つい笑ってしまう。

「あ、何笑ってるんですか！ せっかく人が心配してるのに……」

むう、と頬を膨らませてくれる彼女。

昨日からぎこちなかった話し方が、幾らか解ほぐれてきたようだ。

「ごめんごめん、でも俺がこんなに集めれたのはキイチちゃんが丁寧に教えてくれたからだよ。ありがとう」

ニツと笑ってみせる。

すると彼女は一瞬目を大きく開いたかと思うと、すぐにプイッと横を向いてしまう。

「ど、どういたしまして……」

「うん」

「……あの」

「うん？」

急に目を逸らした彼女が、今度は少しだけ顔をこちらに向けて何か言いたそうにしている。

「あの、ですね……。……名前……」

「名前？」

すうっと一呼吸。

「……………キイチ、って呼んでくれませんか？」

小さな声だった。集中してなければ聞き逃してしまうほどの。

だけど、彼女は一字一句をハッキリと声に出していた。

恥ずかしかったのだろうか。しかしそれは重要な事なんだと、彼女の表情から十分に理解出来た。

「うん、分かった。……キイチ。よろしく」

「……うん！」

昨日と同じ様に差し出した右手を、しかし今度はしっかりと握られる。

その右手は女の子特有の柔い感触に包まれていた。

ふとキイの顔を見てみれば、そこには花のような笑顔が――――

「んっ、んんっ！ あーあーあー。んー！」

あからさまな声が聞こえてくる。

見れば、ラキさんは何かニヤニヤとこちらを見ているし、先ほどの声の主であるヴェスタさんは明後日の方向を不機嫌そうに見つめている。

「あー、仲が良くなるのは結構だがー、今から飯を食べるんでなー。早く移動したいんだがー」

棒読みだった。

思わずキイと顔を合わせると、同時にクスリと笑う。

「じゃ、行こっか」

「ふふっ、そうですね」

不機嫌そうなヴェスタさんを宥めるのは大変そうだ。

昼食はラキさんが作って来てくれていた干し肉と野菜のサンドイッチだった。

ソースなんかは無いので少々味気無いが、それでも十分美味しい。

「おいしかったです。ごちそうさまでした」

「はい。お粗末様でした」

恐らくだが、元々が国産のMMORPGなので、こういう礼儀は同じの様だ。

「私、お水飲んでくるね」

キイがそう言って立ち上がると、ラキさんもそれに続くように腰を上げる。

「じゃあ私も行ってこようかしら。ヴェス、ヘイルさん、荷物の番お願いね」

「おう」

「分かりました」

ひらひらと手を振って見送る。二人の姿はすぐに木の陰に隠れて見えなくなった。

二人の気配が離れていったのを確認し、ふとヴェスタさんの方を見ると、何故か赤い瞳がこちらの顔をじっと捉えていた。

「……どうかしたんですか？」

顔をしかめているが、何か顔に付いているのだろうか。

「……いや、キイの事なんだがな」

一言、そう呟いた。

そのままヴェスタさんは唸りながら考え込んでいたが、何かを決めた様に頷く。

「ヘイル、お前は昨日村の人を見たよな？」

「ええ」

「どう思った？」

「……あまり良くは思われてないみたいでしたね」

「あー、まあそれもあるんだが……。まあ、何となくは気づいてると思うが、村には……若い連中が居ないんだ」

そう言われれば確かに。

村で見かけた人たちは、皆50歳かそこら、またはそれ以上の人達だった。

あれ、でも。

「ヴェスタさんたちは何歳ですか？」

「よく気付いたな。俺とラキは35歳だよ。キイは16だな。……」

実はな、村で一番若いのがキイで、その次が俺達なんだよ」

なるほど、少し読めてきた。

「……そうなんですか。他の若い人達は何処へ？」

「他の連中はみんな出て行ったよ。この国がおかしくなり始めた頃

にな。唯一若い組で残ったのが俺達なのさ」

例の愚王ブリード・クリステインの所為だろう。

王が変わり、人間以外の種族——いや、自分以外の者を省みないその政治は、この地に住む多くの者に不幸を齎もたらした。

あの村も例に漏れずその煽りを受け、耐えきれなかった者達が村を出た。そういう事だ。

そして、他に若い人達が居ないという事は——

「じゃあ、キイは今まで……」

「……友達が居なかったんだ。6歳の頃までは大勢居たが、皆出て行ってしまった。……それまで仲が良かった分、今までの10年は辛かったと思う」

その事を話すヴェスタさんは、悲痛な表情をしていた。

「キイの事を考えれば俺達も村を出て行くべきだったのかも知れないが、どうにも他の年上の人達を見捨てる様な気がしてなあ……結局出来なかったよ」

「……それは、間違っていないと思います。正しかったのかは分かりませんが、少なくとも間違っていないと思います」

部外者の自分が口を出すべき事ではないのかも知れない。

しかし、何故か黙っては居られなかった。彼が自分を責めているように見えたから。

ヴェスタさんは少し驚いたような顔をしていたが、すぐに顔を緩めて照れくさそうに頭を掻く。

「いや、ありがとう。まあ、俺の事は良いんだ。同じような事をラキにも言われたしね」

照れくさそうにしていたヴェスタさんが、すぐに真剣な表情に変わる。

「それでキイの事なんだが……キイは、嬉しいみたいなんだ」

「俺が来た事が、ですか」

「うん、長い間同年代の友達が居なかったからね。……良ければ村から出るまでの間だけでも、キイに外の世界の話をしたり、一緒に遊んでやってほしい。キイは今まで寂しかっただろうから」

外の世界、という単語に頬が引き攣る。

何せ持っているのは295年前の世界の記憶だ。これを今の世界の事として話すのは気が引ける。

ただまあ、ここで無下に断る気は全く無かったが。

内容を選べば話せる事は幾らでもあるし、それを彼女が望むなら断る理由はない。

「ええ、分かりました。その程度で良ければいくらでも」

「……ありがとう。キイも喜ぶと思う」

ヴェスタさんはふっと微笑む。

それに釣られて俺も表情を緩める。

やっぱりこの家族は良い人達なんだと実感する。

娘の事を良く考えて、あんなに真剣に人に頼むことが出来る。話すだけで彼らが喜んでくれるなら、進んでそうしよう。



この世界で最初に出会ったのがこの人達で本当に良かった。

「しかし遅いなあいつら」

「ほんとですね。そろそろ帰ってきてても良い頃ですが……」

ヴェスタさんはクックククと笑いながら、本当に女ってのは……とかぼやいている。

そういや元の世界の女友達も服を買う時は最低30分は掛けるとか言ってたな。

そうして二人を待ちながら、ヴェスタさんと話し込んでいる時だった。

「きゃあああああ！」

「！」

唐突に聞こえた悲鳴。それは間違いなくキイの声だった。

「ヴェスタさん！」

「ああ！ 行くぞ！」

ヴェスタさんは瞬時に立ち上がり、槍を持って勢いよくその声の方向へ駆け出す。俺もそれに追従する。

当然籠や荷物は放置。そんな物は後で取りに来ればいい。

「魔物か……！」

ヴェスタさんがそう呟いて舌を打つ。

そう、ここはマレロの森。獣や魔物が数多く生息している。むしろ今まで出会わなかったのが不思議なくらいだ。

キイの近くには武器を持ったラキさんが居るはずだ。まだ悲鳴が聞こえて数秒、大事には至っていないはずだ。

祈るような気持ちで、木々の間を全力で駆けていった。

## 第6話 ある日、マレロの森の中（後編）

「ヴェスタさん、もうすぐです！」

「ああ、魔物の気配がここまで感じ取れる！　けど、どうしてもそんな奴がマレロの森に……」

記憶ではここには20レベル程度のモンスターしか居なかった筈だ。一応配置されていた中ボスのような敵も精々40に届かない程度。

しかし、“ヘイル”の経験からすると、この気配は60レベルはある。

ヴェスタさんの反応からしても、それほど強力な魔物は今までも居なかった様だ。

そして数瞬の後、視界が開けると同時に飛び込んできた光景。

そこには血塗れで伏せるラキさんと、それを庇う様に前に立つキイ。そしてキイの目の前には、黒い毛皮に覆われ、額から小さな角が生えた熊型の魔獣が居た。

それはこの森に生息している筈のないアウトベアという魔獣だった。

アウトベアの多くは群れを作らない。子を作る時以外は大抵一匹で行動し、深く瘴気の濃い森に好んで住む、と“ヘイル”の記憶にあった。

確かに目の前のアウトベアは一匹だが、“キングダム”でアウトベアを見かけたのはもっと西の森だった。

どうしてこんな所へという疑問は残るが、今はそれを調べる術も

時間も無い。

「ラキ、キイ！」

「！ お父さん！」

「待ってろキイ！ ……くそッ！ おいその魔獣、てめえの相手は俺だ！」

ラキさんの姿を見たヴェスタさんは、アウトベアに向かって駆け出そうとするが、とっさに肩を掴む。

「待って下さい！ 相手は凡そ60レベルがあります！ ヴェスタさんじゃ勝ち目がありません！」

「ッ！」

4倍のレベル差がある相手では分が悪すぎる。何も出来ずに終わるだろう。

「……じゃあ、じゃあどうしろってんだ！」

この状況、どちらかが囷になって気を引くしかない。今すぐ倒す事も出来るが———今はまだ、力を知られたくない。

しかし囷を任せるには、ヴェスタさんは確実に焦りすぎている。目の前でラキさんが倒れているせいだ。

気持ちは分かるが、これではとても任せられない。

「仕方ありません、俺が囷になります！ その間に二人をさっきの

場所へ！」

「ッ！　だがそれは……」

ヴェスタさんは渋る。恐らく出会ったばかりの俺を囿にするのに引け目を感じたのだろう。

アウトベアはこちらの出現に気を取られて止まっているが、何時までも待つてはくれない。

「早く！　ラキさんを助けたいんでしょうが！」

「……すまん！」

同時に駆け出す。ヴェスタさんは二人の近くへ、俺はアウトベアの横へ。

アウトベアは近くに寄ってきた方が危険だと判断したようだ。

こちら側へ体を捻ると同時に、その遠心力を利用して右腕を振り抜く。

それは酷く緩慢な動きに見えた。

こちらのAGIがアウトベアを上回っているのもあるが、何より“ヘイル”の経験がこの体にはあった。

「らああああ！」

難なくその攻撃を避けると、外したせいで一瞬硬直したアウトベアの顔を蹴り上げる。

多少加減したが、こちらに気を向かせるのには成功したようだ。

「ガァァァァ！」

先ほどの蹴りで怒り狂ったアウトベアは、もはやキイ達の事など眼中にも無い様子だった。

単独行動を好む事からも、アウトベアがプライドの高い種族だと言うことが窺える。

一度蹴っただけで容易く挑発に乗ってくれた。

大変そうに見える様にアウトベアの攻撃を去なしながら、チラリとヴェスタさんを見る。

丁度、キイと一緒にラキさんの腕を肩に回して運ぼうとしている所だった。

「ヴェスタさん！ 置いてきた荷物にポーションが入っています！使ってください！」

もしもの時を考えて事前にアイテム欄から取り出して、荷物に入れておいたのだ。

「……ありがとう！」

ヴェスタさんは一度だけこちらを向いてそう言うと、ラキさんを運ぶ。

キイは泣きそうな顔をしながら、何度もこちらを見ている。

そして彼女は、一瞬だけ足を止めた。

「死なないで……！」

そうとだけ言うと、それからは一度もこちらを振り返らなかった。

泣きそうな顔をしていたのはラキさんが心配だからだろう。

しかしそんな中でも、キイは確かに“友達”の事をも心配してくれていた。

違うなら、恐らくわざわざ足を止めてまで声を掛けてはくれなかっただろう。

「あーもう。後ろめたいなあ……」

もし力を隠したりしていなければ今すぐにこの魔獣を倒して、わざわざ運ばなくても魔法で回復させる事も出来た。

ラキさんは気絶こそすれ、致命傷ではなかった。放っておけば危ないかも知れないが、ポジションを飲んで安静にすれば一日で治るだろう。

だけど、確かに俺には今すぐに救う力があつた。

その事実が心に小さな影を落とす。

「ごめんなあ……」

その謝罪はきつと、あの優しい家族に対してだった。

決して自分の心の弱さに対してではないと、そう自分に言い聞かせた。

アウトベアの攻撃は止まない。

右腕を振れば、体を後ろに反らして避ける。そこに噛み付こうとするアウトベアの顔面を足の裏で蹴って、空中で一回転して距離を取る。

こちらが着地した隙に、諦めずに飛びかかってくるアウトベア。しかしやはり遅い。隙が出来ても、回避するには十分な時間があつた。

飛びかかりを避けた際、アウトベアには仕留めれるだけの隙があつたが、敢えて距離を取る。

アウトベアも多少冷静になったようだ。流石にこちらの力を理解したらしい。

3メートル程の距離を置いて、お互いに睨み合う。

「そろそろかな……」

戦い始めて約五分ほど経った。

もう戦闘音が聞こえない位には離れただろうか。

実はヴェスタさん達とは逆の方向に誘導しながら戦っていたので、今は結構な距離がある筈だ。

ここなら大丈夫そうだ。

そう思い、“戒めの指輪”を右手の中指から外す。

瞬間、膨大な魔力が体の回りに吹き荒れる。

急に捻った蛇口の水の様に、抑えつけられていた分が溢れ出しているのだろう。

表情の無い筈のアウトベアに、目に見える程の恐怖が浮かぶ。



視界が蜃気楼の様に揺らぎ、歪む。  
発している自分でさえ感じる程の威圧感。

「まあなんだ、熊。なんでここに居るかは知らないが、お前も腹は減るよな。だから襲ったんだよな……」

アウトベアには言葉は理解出来ない。  
分かってはいるが、言わずには居られなかった。

「けど、襲った相手が悪かったなあ。……選りに選って俺の“恩人”で……こっちで初めての“友達”を襲った」

俺は、キレていた。

元の世界でも喧嘩なんかした事は無かったのに。

ラキさんを傷付けた事は許せないが、ここまで激昂しているのは何故だろう。

「――我は風の化身。天を操り、空を支配する者」

魔法詠唱。

“キングダム”ではスキル欄から魔法を使用していた。

しかしウィンドウにはスキル欄は無い。

だから“ヘイル”の記憶から魔法行使に必要な詠唱文を探し当てた。

目の前のアウトベアは動かない。

「風は嵐となって世界を咲<sup>わら</sup>う。無力な子羊共が嘆き、倒れ、その亡骸が朽ち果てるまで。大地が泣き、叫び、赦しを乞うまで」

“アンリヴァル”は左手の中指に着いていた。  
しかし、“キャリバーン”は壊れてしまったらしい。

記憶の最後、魔王が死んで城が消滅する瞬間。“キャリバーン”は主人である“ヘイル”を守った。

その身を犠牲にして“ヘイル”を異次元に転移させた様だ。  
その記憶が“アンリヴァル”から流れ込んでくる。

今まで力を使わなかったせいで、“アンリヴァル”も深い眠りにいたらしい。

アイテム欄に“キャリバーン”が無かったのはそのせいかと納得する。

“溢れ出していただけの”魔力とは比べ物にならない程の魔力の奔流。

徒<sup>ただ</sup>でさえ“溢れ出していただけの”魔力に怯えていたアウトベアは、もはや抵抗する気力さえ失っている様に見えた。

「笑え、咲え、力を振るえ。嵐は暴力の権化。力無くば跪け！ 力有らば総てを跪かせろ！」

絶対的強者。

レベル概念のあるこの世界において、俺はその立場に居た。

魔法についてのINT——知力とはつまり、魔法に対する理解度。INTが高ければ高いほど魔法に対する理解は深くなり、それに比例して魔法の威力と詠唱速度は上昇する。

一般的な魔法使いで100程度。日頃から鍛錬を怠らず、研究を重ねた熟練の魔法使いで400程度。

それが1020。さらに“アンリヴァル”の効果でさらに半分の詠唱時間。

アウトベアは見るのも悲しくなる程に怯えていた。  
しかし許す事はしない。

「じゃあな————『ルーラープラス王の轟嵐』」

それは風系統の上級魔法。

手を前に翳すと、吹き荒び周囲を駆け廻っていた無秩序な風の激流が、アウトベアを中心に収束し襲い掛かる。

風は無数の刃と成ってその身体を無情に切り刻み、確実に命を削り取っていく。

抵抗は意味を成さない。包まれたが最後、その者の生存は絶望的になる。

抗うことの許されない程の圧倒的な攻撃速度を誇るその魔法は、瞬く間にアウトベアの体中に新たな傷を刻み続けていた。

気づけば、アウトベアは既に息絶えていた。

翳ひるがえしていた手を翻し、風に乗せたアウトベアを後方へ飛ばす。ヴ  
エスタさん達がいる方向とは真逆へ。

飛ばされたアウトベアは矢のように、そして音より速く、遙か彼  
方へと消えていった。

「ふう……。いきなり上級魔法使ったせいか疲れたな……」

額を拭うと、そこには僅かだが汗が浮かんでいた。

体内に感じる魔力量は今使った上級魔法の100倍近くはある。  
ならこの汗は、まだ自分が“ヘイル”の体に馴染んでいない証拠  
だろうか。

一度深呼吸をする。

周りを見渡せば、隕石でも降ったのかと思う程に荒れ果てていた。  
近くに生えていた櫟の木々は、根から葉まで跡形も無いくらいバ  
ラバラにされていた。

20メートルほど離れた場所でようやく生き残った木が確認出来  
る。

一カ所集中型の魔法でこれなのだから、他の上級魔法の威力を想  
像すると恐ろしい。

「力を隠すのは正解か……」

一歩間違えれば、自分が守りたい人でさえ殺しかねないほどの力  
だ。

今回はどうしても全力でアウトバアを叩きのめしたかったが、これからは自重しなくてはならない。

「ラキさんは大丈夫かな……」

右手の中指に再び“戒めの指輪”を嵌める。

ポーションさえ飲めば大丈夫だとは思うが、万が一という場合もある。

俺も早く向かった方が良いだろう。

ぐつと足に力を込めて、地面を強く蹴る。

『探索<sup>サーチ</sup>』で最大周囲3キロ程度は完全に把握出来る。三人の位置も方角だけは割り出せた。

出せる全速力で木々の間を疾走する。

初めての戦闘は、爽快感とはかけ離れた物だった。

## 第7話 一日経って

「ヴェスタさん、居ますか？」

木製の扉をノックする。

堅い音が響き、タタタタと小走りする音が扉に近づいてくる。  
ゆっくりと扉が開かれると、そこにはキイが立っていた。  
髪もボサボサで、どこことなく顔色も優れない。

「あ、ヘイル……」

「おはよう。……キイはもう大丈夫？」

「うん、おはよう。私は大丈夫だよ」

そう言っ取り繕う笑顔はぎこちない。

よく見れば目の下には隈が出来ている。一晩中看病していたのか。

もう命に危険は無いのだから、流石にそこまでしなくても……と  
考えてしまうのは、俺が家族でないからなのか、それとも心が冷た  
いからなのか。

キイにとって、それだけラキさんが大事なのだろう。

「そっか、良かった。ラキさんはどう？」

「……お母さんはまだ寝てる。けどヘイルのおかげで傷も治ったし、  
心配ないよ。ヘイル、ありがとう」

その言葉にチクリと心が痛んだ。

ラキさんは今だに寝込んだまま意識を取り戻していない。

多くとも数日中には目を覚ますだろうが、こうなってしまったの  
は完全に誤算だった。

あの後、三人の元へ駆け付けた時に見たのは、気絶しているラキさんに上手くポーションを飲ませられず、焦るヴェスタさんとキイの姿だった。

少しずつは飲んでいたが、如何せん気絶している人は自発的に嘔<sup>え</sup>下<sup>んげ</sup>してはくれないのだ。

俺を見た二人は驚いた顔をしていたが、魔物は遠くにおびき寄せた後に撒いたと説明しておいた。

実際あのアウトベアの攻撃力や耐久力はそれなりの物だったが、素早さだけならばヴェスタさんの方が上回っているくらいだった。撒けたと言っても大して怪しまれないだろう。

倒した、と言わなかったのは勿論実力を隠す為だ。

30レベルだと言っているのに60レベルの魔物を素手で、しかもこの短時間で倒してしまったら不自然な事この上無い。

だからわざわざ風の上級魔法を使って死体を遠くに飛ばしたのだ。

ただ“戒めの指輪”を外したのには他にも理由がある。

一つは純粹に怒ったから。

“初めての戦闘”で頭に血が上っていたのもあるが、自分の友達が危険に晒されて怒らない訳がない。

もう一つは、自分の実力を正確に把握する為。

記憶から大体の予想は出来るのだが、ステータスも伸びているし、

何より一度は身を持って体感しておきたかった。  
その結果がアレだった訳だが。

しかしやはり実験しておいて正解だったと思う。

“キングダム”では周りの木々を切り刻み、吹き飛ばしてしまう様な二次的な被害は無かった。

ゲームなのだから当然と言えば当然なのだが。

しかし現実として起こってしまったのだから、その事実を認めざるを得ない。

あんな無差別に被害を出すような危険な魔法を、味方がいる時に使う事は出来ない。守るべき者まで傷付けてしまうだろう。

そういう時は物理的な攻撃か、低級魔法だけで対処するべきだ。それが分かっただけでも十分収穫はあった。

そして今回、その収穫とは対照的に、誤算による失敗があった。

それはあのアウトベアに毒があった事。

到着してすぐに、苦しむラキさんに“治療”<sup>ヒール</sup>を掛け、傷口を塞いだ。その間もヴェスタさんが少しずつポーションを飲ませていた。

一連の治療が終わって一息ついた時、異変に気付く。

傷は全て塞ぎ、ポーションで体力も回復している筈だった。

それにも拘わらず、ラキさんの顔色は悪くなり、呼吸も荒くなる一方だった。

アウトベアには毒は無かった筈。

それは“ヘイル”の記憶でもそうだし“キングダム”でもそうだ



った。

しかし出血以外に体力を奪う状態異常とえば毒以外には考えられなかった。

試さないよりはマシだと思い、半信半疑ながらも“状態回復”<sup>キュア</sup>を掛けると、それは見る見るうちに効果を現した。

青ざめた顔が色を取り戻し始め、数分後には呼吸も穏やかな物になった。

しかしアウトベアの毒はそのレベルに見合った毒性を持っていた様で、レベルの低いラキさんの体には随分と堪えたらしい。

その後も一日中目を覚ます事は無く、現在に至ると言う訳だ。

「……ごめんキイ。まさか毒があるとは思わなかったんだ。もっと早く解毒してれば……」

本当に申し訳無く思う。

直ぐに助けられるだけの力がありながら、それをしなかった事を。

力を隠す事を優先し余計な時間を掛けた。事情があるとは言え、その分ラキさんを苦しめた。

しかしそんな心境を知ってか知らずか、キイはブンブンと頭を振って俺の言葉を否定する。

「そんな事ないよ！　ヘイルは時間を稼いでくれたし、傷も治してくれた。本当に感謝してるの！　……もしヘイルが居なかったら、お母さんは……」

そこまで言って僅かに目を潤ませる。

俺が居なければラキさんは今はもう生きては居なかっただろう。  
その事をわざわざ思い出させてしまった。

失言だったか。

「ごめん、そんなつもりじゃ……」

「……うん、いいの。とにかくヘイルのおかげでお母さんは助かった。だから謝ったりしないで。ね？」

グイッと顔を近づけてくるキイ。手を掴んで無理矢理引き寄せられる。

その真剣な顔は、了解以外の返答は認めないと言外に訴えていた。

「わ、分かった、分かったから！ 近い近い！」

「ん、よし」

そう言ってキイはニッコリと笑い、手を放してくれる。

キイは悲しそうな顔をしていると思えば、急に強気な態度に出たりする。

コロコロと表情の変わる彼女は、本当に昨日までのキイと同じ人物なのだろうか。

二日前のオドオドしていた少女は一体何処へ行ったのやら。

もしかしたら、ラキさんを助けた事である程度気を許してくれたのかも知れない。

この表情豊かなキイの一面は、本当なら今も居た筈だった“友達”に見せるべき、彼女の本来の性格なのだと思う。

「あ、そうそう、ヴェスタさんは居る？ 『明日の朝、家に来てくれ』 って昨日言われたんだけど」

この家に来た元々の目的を告げる。

ラキさんの様子も心配だったが、まずは用事を済まそう。

「お父さんは村長さんの家に行ってる筈だよ。何か相談があるみたいだったけど……」

わざわざ呼び付けておいて放置する様な人ではないと思うので、何か急ぎの用件だろうか。  
それなら。

「んー、じゃあラキさんの様子を見て行っても良いかな？ や、勿論ダメならダメでも良いんだけど」

家族が寝込んでいる姿を見せたくない人もいるだろう。  
予め、ダメなら遠慮する事も伝えておく。

「……少しだけね？ 入って」  
「ん、おじゃまします」

キイに導かれて家の中に入る。  
殆ど二日前に見たままだったが、それより多少散らかっている様にも見えた。

「じゃあ付いて来て」

キイが奥に歩き出し、俺もそれに追従する。

すると自然にキイの背後に着く形になり、左右にユラユラと揺れる尻尾が目に入る。

キイが今着ているワンピースタイプの服からはみ出して見えるそれは、毛並みも整っていて手入れがしっかり行き届いているようだ。獣人族にとっては髪と同じ様な物なのだろうか。

毛質も獣の毛などより余程柔らかそうで、彼女の髪と比べても遜色無い。

あれを思いつ切りもふもふしたい衝動に駆られる。が、それはきつと失礼だろうと思ひ我慢する。

というか今までドタバタしていて余裕が無かった為に意識していなかったが、こうして少し落ち着いて考えるとこれは本当に凄い事じゃなからうか。

何せ目の前には犬耳と尻尾の生えた少女がいる。

M M O R P G などでは一般的な、けれど結局はゲームの中のものでしかなかった獣人などと言う一部の男共の妄想が具現化しているのだ。

そして言うなれば、自分自身もその男共の一人だ。

男子なら一度は憧れる空想の物語の世界。剣と魔法、亜人と魔物。自分は今、そんなファンタジーの世界に居て、ファンシーな少女が目の前にいる。

勿論良いことばかりではない。

元の世界に居る友人や家族は心配だし、こっちの世界の魔物は最早“M M O R P G の中の狩りの獲物”ではない。完全なる“敵”だ。油断すれば怪我也負うし、最悪命をも落とす。

——本当に、来てしまったんだ。

昨日の戦闘を思い出し、改めて実感する。

アイテムウィンドウを見た時は幻覚かと思った。ある程度は信じ始めていたが、正直まだまだ夢見心地だったのだ。

しかし目の前で人が死にかけた事で、ようやく実感が湧いてきた。

ああ、これは現実なんだと。

そうして回想している内に、何時の間にかラキさんの眠る部屋まで来ていた様だ。

目の前ではラキさんが目を閉じて、静かに、規則正しく呼吸を繰り返していた。

——キイは背後から獣の声を聞き、その声に振り返った。するとラキさんが血を流しながら倒れていたそうだ。

何故アウトベアがマレロの森に居たのかは分からない。

しかしそのアウトベアのせいでラキさんは怪我を負い、キイとヴェスタさんは悲しんだ。

だが——俺はある意味安堵していた。

その場しのぎの嘘が現実の物となり、既成事実化したのだから。それを内心喜んで——そしてそんな風に考えてしまう自分に、

嫌気が差す。

「ヘイル、もう……良いかな？」

「っと。あ、うん。ありがとう、ラキさんも大事はないみたいで安心したよ。じゃあ部屋から出ようか」

きっと今の俺の顔には薄っぺらい笑顔が浮かんでいる。  
ラキさんの事よりも、自分の事の安心をしている顔が。

それはそれは醜い顔が。

「けど、お父さんも一体何の用でヘイルを呼んだんだろうね」  
「何だろうね、昨日の事ならもう村長さんにも説明したし……これからの事、とか？」

そう言った瞬間、僅かにキイの表情が強張った気がした。  
しかしそれも一瞬の事で、今は特にそんな色は見えない。

まあいいか、と再び思考に浸ろうとした瞬間、ガチャリとドアが開く音がする。

「……噂をすれば、かな」

狙っていたんじゃないかと疑ってしまう程にドンピシャなタイミング。

ヴェスタさんが帰ってきたのだ。

「お帰り、お父さん」

「ああただいま。おや、もう来てたんだね」

「すみません、少しお邪魔させて貰ってます」

「いいよいいよ。呼んだのはこちらだしね」

俺とキイが座っているテーブル周りの椅子の一つにヴェスタさんも腰掛ける。

「さて。早速だが、ヘイルを呼んだ理由なんだがね。……頼みがあるんだ」

「……頼み？」

一体何だろう。魔物の駆除か何かだろうか。

ふう、と息を吐いて呼吸を整えるヴェスタさん。

スツとこちらの目を見ると、重々しく口を開く。

多分前の続きで食料になる物を集めて欲しい、とかじゃないかなーなんて考えるが。

「実は……街に行つて欲しい」

「……え？」

しかしそれは予想だになかった言葉だった。

## 第8話 マルキスタンの街と出会いと

「へえ、この街はまだ残ってたんだ……」

「？　ヘイル君はこの前までここに滞在してたんじゃないのかい？」

「え？　あ、いや何でもないんです、ただの独り言ですから」

「……？」

思わず声に出してしまっていた。危ない危ない。

しかし、この街がまだ残っていた事には驚いた。今より300年近く前に造られた筈なのに。

“キングダム”で最後に転移した街、マルキスタン。“キングダム”でフレンドだったあるプレイヤーが造った街。

マレロの森に近いという事もあり、昔は20レベル程度の初心者プレイヤーやオーク材を採取しに来たプレイヤーで大いに賑わっていた。

今も決して寂寥としている訳では無いが、その光景には違和感があった。

街の中へ入れば商店も開いているし、冒険者らしき人々も通りを歩いている。

衛兵も街中に点在しているし、住人らしき人々も忙しく街を走り回っている。

けれど――ああ、そうか。

「……人間しか、居ないのか」

「……」



隣を歩く、野草から作った大量の茶葉を入れた袋を背中に担ぐ男性は何も言わない。

ここにはエルフもドワーフも竜人も獣人も、誰も居なかった。ここに居るのは人間だけ。俺の隣を歩いている、獣人のダンさん以外には。

あの村に住むダンさんは、今回俺と一緒に茶葉や毛皮を売りに来た。勿論頭にはフードを被り、尻尾は長いローブで隠している。これはヴェスタさんに頼まれた事だ。

何をするつもりなのかは分からないがお金が欲しいのだそうだ。あの村では外との交流が極端に少ないので、生活するのにお金は必要無いと思うのだが、何か考えがあるのだろうか。

因みに今回は手伝いではなく冒険者として“依頼”をしたいそう  
で、帰れば売って出来たお金から報酬を支払ってくれるらしい。  
正直こちらの世界に来て気絶していた所を助けて貰って、その上  
村に住まわせて貰ってるだけでも相当ありがたいと思うのだが、そ  
こはヴェスタさん達が憚らなかったので一応報酬を受け取る事にし  
た。

ていうか他人にお金を預けるってのも変な話だ。俺が持ち逃げし  
たらどうするんだろう。いやしないけど。

ダンさんが付いてきてるのもそういう意味合いがあるのかも知れ  
ない。

ちなみに付き添いがヴェスタさんじゃないのは当然ラキさんの看  
病があるからだ。

ともあれ、俺は街に来て少々興奮していた。  
街になれば本屋があるだろう。そして歴史書なんかも置いてある  
筈だ。

何らかの手掛かりがあれば良いのだが。

「茶葉を100グラムほど貰える？」

「それなら銅貨2枚です」

「はい、銅貨2枚」

「ありがとうございますー」

今、俺とダンさんは大通りの一角のフリーマーケットで露店を開  
き、持ってきた茶葉や毛皮等を売り捌いている。

商店に持って行っても酷く安い値を付けられるか、そもそも買い  
取りを拒否されるかだったからだ。

ゲームならば常に一定の値段で買い取ってくれたのだが、それと  
同じ様にはいかないようだ。

この世界の貨幣価値としては

小銅貨10枚で銅貨1枚。

銅貨10枚で小銀貨1枚。  
小銀貨10枚で銀貨1枚。  
銀貨10枚で小金貨1枚。  
小金貨10枚で金貨1枚。  
そして金貨100枚で星貨1枚となる。

つまり星貨を除き、各貨幣が10枚で次の貨幣と同等の価値がある。

通貨単位は“ジェル”で、これは“キングダム”でも使われていた。

小銅貨1枚は1ジェル、つまり星貨1枚は1千万ジェルになる。

途中で見た物価からすると、4人家族が1日を食べて過ごすのに銅貨8枚程度。1ヶ月では小銀貨25枚といったところか。

星貨以外は名前の通りだが、星貨は何やら特殊な物質で出来ているらしい。直接見たことは無いので詳細は不明。

因みにグラムだとかセンチだとか、そこらへんの単位は地球と同じらしい。やはり“キングダム”が国産M M O R P Gで、恐らくここが“アスガイア”だからなのだろう。

さて、陽も傾いてきたし、そろそろ宿へ向かった方が良いかな。

「ダンさん、人通りも疎<sup>まば</sup>らになって来ましたし、今日はここまでにしておきませんか？」

「ん？ ああ、そうだね。残りはまた明日にしようか」

隣で荷物を整理しているダンさんに声を掛け、目の前の品を片付け始める。

毛皮は畳んで大きな袋に詰めていく。

茶葉は100グラム毎に分けて、小さな袋に入れている。その袋の口を締めている糸の一部に、順に紐を通していく。

こうする事で、紐を持つだけで全ての茶葉袋を持ち運ぶ事が出来るようになるのだ。

しかしキノコが余ってしまったのはどうしよう。

ついこの前マレロの森の中で採ってきた、小さな、しかし濃厚な味わいが特徴のキノコ。非常に美味しいと思うのだが、何故か誰一人としてこのキノコには興味を示さなかった。

もしかするとこの国にはキノコを食する風習が無いのかも知れない。

ならこのキノコは今日の晩飯にでも使おうか。

そんな事を考えながら片付けをしていた時、不意に影が目の前で立ち止まるのが見えた。

「すまない、今日はもう売り終えてしまったのだろうか？」

女性らしき声が頭上から掛かる。

顔を上げてみれば、そこには銀の軽鎧に身を包んだ女性が立っていた。

汚れ一つ無い様に見える彼女の軽鎧。

しかし目を凝らして見ればそこには目立たない程度の小さな傷が、しかし数え切れない程多くの、戦いの記憶として刻まれていた。

腰に帯いた剣は装飾の少ないながらも、その荘厳な雰囲気醸し

出す白銀色の鞘からは、かなり良質な一振りだと言う事が伺える。

数々の修羅場を潜り抜けてきた痕跡の残る白銀の軽鎧と、研ぎ澄まされた気配を放つ白銀の剣。

加えてそれらの装備に引けを取らない、彼女自身の覇気。

間違いない。目の前の女性は相当な実力者だ。

しかし、そんな威圧感とは裏腹に。

肩甲骨のあたりまで伸びた彼女の金髪は、後頭部で一つに纏められている。

沈み始めた太陽の赤みがかった光は弱々しく、しかしその微弱な明かりだけでも彼女の金色の髪は燦然と輝いていた。

シャープな顎から左右に伸びる、なだらかな輪郭。

元々は白かったであろう皮膚は少し日に焼けているが、そこには染み一つ無く、人一人分離れていても肌の艶が見える。

彼女が、一度パチリと瞬く。

こちらを見つめる形の良い大きな目。

色素の薄い、長い睫が彼女の目を一段と大きく見せている。まつげ  
中心にある金の瞳は、夕陽の光を反射して煌めいていた。

筋の通った鼻は高く形良く、それでいてあまり目立たない程度に収まっている。

ほんの少しだけ開かれた唇から漏れる吐息が艶めかしい。

一つ一つを注視してみれば彼女はとても大人びたパーツを持っていた。しかし視点を引いて見てみれば、それはまだ幼さの残る顔立ちだった。

見た目、年の頃およそ18程度。

艶やかなパーツと未成熟な雰囲気。

矛盾した二つの要素を合わせ持つ彼女は――美しかった。

さらに彼女の身に着ける銀色の武具と金色の髪。

その金と銀のコントラストが犯し難い神聖さを放ち、そして彼女の美貌をより一層引き立てていた。

そして彼女は美しいだけでなくどこか――ひどく懐かしい、匂いがした。

「もし、聞いているか？ 何か具合でも悪いのか？」

「……………え？ あ、ああ、すみません。少し惚けてしまいました。どうかしましたか？」

どうやら少しばかり自分の世界に入り過ぎていたらしい。

目の前の女性もダンさんも少し怪訝な表情をしている。

しかし彼女から感じる懐かしい感覚は一体……。

「む、何とも無いなら良いのだが。実はケット代わりに使っていた

毛皮がボロボロになってしまったのでな、新しいのを買おうと思ったのだが……。今日は店仕舞いかな？」

彼女はそう言って怪訝そうな表情を元に戻す。

毛皮をケツト代わりに、というと出で立ちからしても、やはり冒険者か何かだろうか。軍人なら支給される物があるだろうし。ともあれ。

「あ、店仕舞いはしてますが構いませんよ。どれが良いですかね？」

先ほど仕舞った毛皮類を再び引っ張り出し、何枚か広げて見せる。既に村の人達に鞣なめされた後の物なので、腐る事は無いし鞣す前よりも柔らかい。

「ふむ、なかなか大きいな。傷も見当たらないし」

彼女は俺の広げ持っている毛皮を手にとって、しげしげと眺めている。

毛を摘んだり表面を撫でて肌触りを確かめているようだ。

毛皮を調べているその腕に無駄な肉は付いておらず、筋肉も引き締まっている。

肉刺まめの潰れた様な痕の残る手のひらは、確かに剣士のそれだ。

風が吹き、彼女の髪がふわりと躍る。

なんとなく失礼だとは思いつつも、彼女の顔を見つめ続ける。

彼女は正しく美人だ。長い睫も自然に整った眉も、小さな顔も形良い目も。

しかし彼女には、魅力的な容姿以外にも何か惹き付けられる物が

あった。

それは一体何だろうか。

言うなれば、既視感のような、親近感のような何か。

ハッキリとはしないが、確かに彼女には“何か”があった。

「うん、これにしよう。一枚売って欲しいのだが、いくらになる？」

そう言って彼女は一枚の毛皮を手取る。確かこれはブラックウルフと言う、その名の通り黒い体毛が特徴的な狼の毛皮だ。

ブラックウルフ自体はさしてレベルも高くなく、村の人達でも十分に狩れる程度のモンスターだ。

しかしこの付近には個体数があまり多くなく、毛皮が手に入り辛いらしい。

ならば値段は少々高くても構わないだろう。

「そうですね、この辺ではブラックウルフの毛皮は手に入り辛いので……小銀貨5枚、500ジェルでどうですか？」

少々ふっかけた値段を提示してみる。

“この辺りでは珍しい”だけで、そもそもブラックウルフ自体はそれほど希有な存在ではない。

初心者時代に東の方でよく狩っていた覚えがあるほどだ。

ただ、商売は最初に高めの値段を出して交渉する物だと聞いた事があったので、それを少し実践してみようと思ったのだ。



だがしかし。

「ん、分かった。では小銀貨5枚だ」

「……あ、どうも」

あっさりと払われてしまった。

ヴェスタさんからブラックウルフの毛皮は小銀貨2枚で売れれば良い方だと聞いていたので、正直拍子抜けてしまう。

高く売れたのは良いけれど、なんか悔しいです。あとちょっぴり後ろめたい。

代金を受け取って彼女に毛皮を渡す。

すると彼女は早速ふわりと毛皮を羽織って見せる。

「うん、これは良いな。とても暖かい。これからの季節にぴったりだ」

黒と金と銀の彼女は、嬉しそうに顔を綻ばせた。

自然、それに釣られてこちらも頬が緩む。

先ほどまでとは打って変わって、花の様な笑顔。ほぼ無表情だった人が、急に笑顔になるとこんなにも可愛いのかと感心してしまう。これがギャップ萌えと言うやつなのか。おそろしや。

そしてふと顔を見ると、彼女の目は俺の腰のあたりに向いていた。そこにあったのは、締めた筈の袋の口から顔を出しているキノコの姿。卑猥な意味ではない。

「……それも売り物なのか？」

彼女はじいっとキノコを見つめながらそう言う。

「えっと、一応そうですけど……何か？」

彼女はふむ、と顎に手を当てる。

先ほどの笑顔はどこへやら、一転して何やら難しい顔をしている。

「……農民の様な服装をしているが、貴方達はこの近辺の人間ではないのか？」

「……？ あの、言っている意味がよく……」

確かに今の俺の格好は見た目農民のそれだが、何の関係があるのだろうか。

「いやなに、この国では“キノコ類の摂取禁止令”なる物があると聞いたのでな。確か発令は1年前だったか。商人が他国から運んでくる分には問題ないが、この国で採ったキノコ類を食するのは違法なんだそうだ」

……何だそれ。それもあれか、例の愚王がやってんのか。

ダンさんの方を見ると、やはりそんなふざけた法令は初耳だったらしく、フードに隠れた顔に驚いた様な色が見える。

まああの村は外との交流をほぼ絶っていたみたいだから、聞いた事が無いも仕方ないだろう。

しかしマレロの森では別段キノコ類が絶滅する様な雰囲気は無かった。というかあの一日だけでも数十種類は見つけた。

一体何の目的でそんな事をするのかは甚だ疑問である。

ただそういう事なら、誰一人キノコにだけ興味を示さなかった事にも頷ける。

どう見ても他国の商人には見えないこの格好でキノコを売っている、それは国内で採った“違法な”商品だと思うだろう。実際そうだし。

「そうだったんですか。教えて頂いてありがとうございます」  
「礼はいい。……ただ、気をつけた方が良く。恐らく、貴方達がこれを売っていたと言うのは“街”の方にも伝わっているはずだ」

そう言った時、彼女は“街”の部分を特に強調していた。  
それが何を意味するのかは分からないが、“街”に捕まらないように、と言う事だろうか。

「分かりました。気を付けます」

頭を下げて礼をする。

再び顔を上げた時、彼女は少しだけ微笑んでくれた。

「うん。それではな。良い毛皮をありがとう」

手を振って見送ると、彼女も軽く手を挙げて応じてくれた。

暫くその後ろ姿を目で追っていたが、やがて彼女は人の流れの中に消えていった。

……名前だけでも聞いておけば良かったかな。

そうしなかった事に軽く後悔しながら、目の前の商品の片付けを再開したのだった。

## 第9話 “異人”の存在（前書き）

やっところさ更新。

## 第9話 “異人”の存在

だんだんと辺りも暗くなり始めた。

彼女が来た時には既に傾きかけていた太陽は、今ではもうその姿の半分程を地平線に沈めていた。

陽が落ちる。

街の中に街灯などという便利な物は無い。街のあちらこちらで篝火が焚かれ始めているが、所詮気休め程度でしかない。

太陽が完全に沈めば、現代日本とは比較にならない程に圧倒的な闇が街を覆うだろう。

俺とダンさんは、そうなる前に宿を取る事にした。

「ヘイル君、すまないがあまり予算は無い。泊まるだけの安宿になると思うが我慢してくれ」

「構いませんよ、気にしないで下さい」

ダンさんは申し訳無さそうに謝ってくれるが、それは仕方ないと理解している。

元々一泊はする予定だったので、一応お金を少しは使って良いと言われている。

しかし今の予算では個室で休む事は出来ない。安宿の大部屋で雑魚寝せざるを得ないだろう。

そして今来ているのが“風葉の音鳴”おとなり。看板に日本語で書いてあった。

ちなみに見た目は酷い。壁の所々に穴が開いてるし、窓の殆どは割れている。

たぶん“風葉の食事処”の隣にあるから、ってダジャレ的に付けた名前なんだろうけど、実際その名前に違わず、風が吹き抜ける音が鳴り響いてるからシャレにならない。

まあそれと見合うぐらいの安さだったから文句は言えないけど。

“風葉の食事処”で腹を満たした後、“音鳴”の方で入口から少し離れた場所に陣取る。

通された大部屋はおよそ100人近くは入れそうなスペースがあったが、入っている人数は50人程だった。おかげで寝転べるだけの余裕が出来ている。

背負っていた荷物を置き、編み目の荒い薄布を床に敷く。お世辞にも寝心地が良いとは言えないが辛うじて睡眠は取る事が出来るだろう。

横を見れば、ダンさんも同じ様にして寝床を確保していた。

さて、これで後は寝るだけになった。

しかし本はどうしようか。明日行っても良いけど、今日の内に買っておきたい気もする。

ダンさんを一人にするのは心配だが、今日商売をしている限りではバレてはいなかった。

ならば大丈夫だろうか。少し聞いてみよう。

「ダンさん、少し良いですか？」

「どうしたんだい？」

ちょうど座ろうとした瞬間の、中腰の形でダンさんは止まっていた。

その体勢はキツいだろうと思い、手で座ってくれとジェスチャーをする。

「実は買いたい本があるのですが、少し行ってきても良いですか？  
すぐに戻って来ますので」

「本か。それは良いが……金はあるのかい？」

その言葉に少しムツとする。ダンさんの視線は腰の部分に向いており、その声色はどこか疑<sup>うたぐ</sup>っている様に聞こえたからだ。

「大丈夫ですよ、ちゃんと自分のを使いますから。心配なら、これ持っておいて下さい」

今日の売上を入れた袋を腰のベルトから取り外し、手渡す。

「すまない、念の為だ。……キノコの事もある」

「……キノコの件はすみませんでした。この街にはほんの少ししか居なかったから、そんな法があるとは知らなくて……」

「……そう、か。もう暗いから気をつけてな」

やはりと言うか、ダンさんは俺の事を信じにくくなっているらしい。

だけど——俺は悪くない。そしてダンさんが俺をあまり信用してくれない事も、そうだ、きっと悪くない。仕方ない事なんだ。

人攫いに狙われるのを恐れて碌に街にも来れず、常に他人を疑っ



て掛からなければならぬのは、俺なら心苦しくて仕方ない。

悪い者が居るとすれば、それはこの国そのものなんだと思う。

酷く主観的な意見だけど――人を信用出来なくしてしまう国の在り方自体が、きっと“悪”なんだ。

そう思うと、先ほど感じた不快感は、既に何処かへと霧散していたのだった。

裏通りにある“風葉の音鳴”を出て数分。表通りに出て少し行つた所に求めていた場所はあった。

辛うじて空は赤みを帯びているが、もう夜と呼んでも差し支え無い時間帯だ。

まだ店が閉まっていなかったのは僥倖だった。

描かれた本の絵が剥げ掛けており、年季を感じさせる色褪せた看板。その掛かった建物の扉を開け、上半身の中に入れて呼び掛けしてみる。

「すみませーん、まだお店やってますよねー？」

「はいはい、待って下さいね」

声がして、やや髪に白みを帯びた男性が奥から出てくる。男性は頬が瘦けており、衣服も随分と傷んでいた。

この人がこの店の主人だろうか。

「どうぞお入り下さい。して、何をお求めですか？」

「あ、えっと、歴史書と、この大陸の地図というか国の勢力図というか、そういう物が欲しいんですが……ありますか？」

「分かりました、少々お待ち下さい」

壮年の男性は再び奥へ引っ込む。

ぐるりと店を見渡す。客の入れるスペースはあまり大きくなく、精々が縦横5メートル程。

商品の類も置かれていない。恐らく盗難を防ぐ為だろう。

木製のカウンターは所々が傷んでおり、記帳の際に使用されているであろう羽ペンも、沈着したインクによって汚く黒ずんでいた。床の木は軽く腐っており、壁紙は破れていない箇所が無い。

酷い。それが率直な感想だった。

それらを補修する余裕も無いのかも知れない。この様子じゃ満足に食べる事も出来ないんじゃないかと思う。

単に客が入らないだけか、それとも税が酷いのか。

そう言えば“風葉の音鳴”もかなり酷い状態だったが、同様の理由だろうか。

しかし客はそれなりに入っていたので、たぶん理由としては後者だろう。

「お待たせしました」

声がして、見れば再び男性がカウンターへ姿を現していた。今度は二冊の本と丸めた大判の紙を腕に抱えている。

腕に抱えたそれらをカウンターの上に置くと、男性は疲れたように一息。

二冊の内一冊は青い表紙。そこそこの分厚さがあり、比較的新しいようで傷が少ない。

もう一冊は茶色い表紙で、かなり分厚い。青い方の二倍はあるだろう。しかもそれなりに年季の入った物らしく、表紙の所々が破れていた。

そして丸められた一枚の大判紙。恐らくあれが地図だろう。

「さて、先にお断りしておかなければならない事があります」

男性は済まなそうな表情をする。

「この青い書が最近100年間程を纏めた物、茶色い書にはそれ以前の事が書かれています。……ただ茶色い書の方は在庫が無いんです。これは私物で、お売りする事が出来ません」

「そんな……」

絶望的な言葉に、思わず声が漏れる。

俺が知りたいのはここ300年の出来事なのだ。特に“ヘイル”が居なくなっただけの事を。

でなければ、一体何があったのか、手掛かりさえ掴めない。

そんな思いを読み取ってくれたのか、男性は救いの手を差し伸べてくれた。

「しかし、この場でお見せする事は出来ます。この青い書を購入して頂けるなら、私が内容を要約してご説明しましょう」

「！ 買います買います！」

その言葉に思わずカウンターに身を乗り出してしまふ。インク瓶がガタリと音を立てて揺れる。

男性は少し驚いていた。すみません。

「それは良かった。では小銀貨5枚でよろしいですか？」

「はい、ちよつと待って下さいね」

そう言つて徐に懐へ手をつ込み、中からジャラジャラと音のする小さな袋を取り出す。

そこには店に入る前にインベントリから取り出しておいたお金、銀貨5枚と小銀貨10枚が入っていた。

誰かの目の前で取り出したりすれば驚かれるだろうし、確実に面倒な事になる為だ。

しかしインベントリから取り出したお金が、昼間に見た硬貨と同じ物だと分かった時は安堵した。

建国中は湯水の如く金を使わなければならなかったし、残りの資産の大部分は銀行に預けていたから手持ちは30万ジェルしか無いが、それでも無いよりは大分マシだ。食うだけなら当分は困らないだろう。

「はい、確かに受け取りました」

小袋から5枚の小銀貨を取り出し、代金を支払う。

男性はそれをカウンターの下に仕舞うと、何やら二脚の椅子を持ってカウンターの外へと出て来た。

「立ちながら話すのも何ですから。どうぞお座り下さい」

「あ、どうも」

簡素な作りの木で出来た椅子はお世話にも座り心地が良いとは言えないが、その心遣いに感謝をする。

男性は俺と向かい合うように椅子に座り、例の茶色い本を手にする。

「さて、早速ですがどのあたりをお知りになりたいのですかな？」

……失礼、私はアーケンです。お名前を伺っても？」

「あ、俺はヘイルです。大体300年前からの事をお願いします」

すると、男性――アーケンさんは何かに興味を引かれたように「ほう」と声を出す。

アーケンさんの目が爛と光った、ような気がする。

「“ヘイル”さんですか……それに、300年前……」

「何か……？」

「……いえ、何でもありません。では早速ご説明致しましょう」

アーケンさんはパラパラとページを捲る。その中ほどより少し前の所で手を止めると、二人に見えやすい様に本を横にし、とある部分を指差す。

そこには『第57章――“異人”の消失』とあった。

「“異人”……？」

「ご存じありませんか？」

一切聞いた事の無い言葉だ。“ヘイル”の記憶にも無い。  
ふるふると首を横に振る。

「そうですか、ではまず“異人”とは何なのか。そこからご説明致しましょう」

アーケンさんは軽く咳払いをする。

「“異人”とは、今から約360年前に突如として現れた者達の総称です。“異人”は私たちと同様の様々な種族が混在しており、さらに私たちと殆ど違わない外見を持っていました。違っていたのはただ一つ——強さです」

「強さ、ですか」

「はい。彼らは私達とは比べ物にならないほどの、とても強大な力を持っていたようです。……とは言っても、彼らは現れた直後は大したことは無かったようですが」

ふむふむと相槌を打ちながら“異人”についての説明を聞く。

「彼らの強さの原因は、その潜在能力にありました。——どんな生物にも成長限界と言うものが存在します。個々の差はありますが、ひとしゅ人種の中でも最も才ある者で、150レベルが成長限界だと言われています」

「それは聞いた事があります。確か今確認されている最高レベルが150なんですよね？」

ヴェスタさんとの話でも聞いた内容だ。

それに、その150レベルの目星も付いている。

たぶん“アレ”だろう。

「はい。現在150レベルは世界に十数人確認されています。そしてその者達はエルフ族、竜人族、半精霊族の三種族に限られます」

「三種族だけ、とは？」

「エルフ、竜人、半精霊。この三種に共通してるのは寿命です。彼らは平均寿命が長く、竜人は500年、エルフは1000年、半精霊に至っては3000年近くになるとも言われています。そして確認されている150レベルは、その全員が“異人”の配偶者であった事が確認されています」

やっぱりか、と思う。

“異人”とは、十中八九プレイヤー達の事だ。

そして150レベルの“異人”の配偶者と言うのは、課金サービスによるものだろう。

“キングダム”では村や街を造る事が出来た。当然、その中には自分の家を持つことが出来る。

しかし例えどれだけ大きな豪邸を造ったとしても無人では物淋しい、と言うことで実装されたのが家人アイテム。自分の家に妻あるいは夫、子や執事、召使いなどというNPCを配置する事が出来た。

そしてその家人アイテムの中でも、妻（夫）と子の一人ずつにだけキャラスタータスを付与し、フィールドに連れて行く事が出来たのだ。

ただし、配偶者の方は自分のレベルの1/2、子の方が自分のレ

ベルの1／3という制限付きだった。

これでは回復と補助程度にしか役に立たない上に、他のプレイヤーとパーティーを組む場合は連れて行く事が出来なかった。

つまりソロプレイヤー以外には全く必要の無い機能だったのだ。

“英雄の右腕”のメンバーはある時にノリでこの機能を購入していたが、“キングダム”ではこの機能は酷く不人気だった。

故に300レベルの中でもこの機能を保持していた者は少数で、その中でも成長速度の遅い三種族に限れば、先ほどの十数人という人数にも納得がいく。

アーケンさんの説明は続く。

「再び“異人”についてですが、彼らの成長限界は我々のそれとは明らかに違いました。書に依れば、彼らの成長限界は300レベルであったとの事です」

それを聞いて、さらに“異人”の正体についての確信を深める。

300レベルはプレイヤーキャラクターのレベルキャップだ。ま  
ず間違いないだろう。

「なるほど、“異人”と言うのは完全に規格外だった訳ですね。：  
：しかし“異人”の消失、とは一体？」

先を促す自分の声が、酷く白々しい。

俺は“異人”の正体を知っている———というか、自分自身が“異人”そのもののなのに、こうして“異人”について説明を受けている  
と言う状況が何となく居た堪れなかったのだ。



まるでアーケンさんを騙しているかのような、変な心地がした。

「——そのままの意味です。世界中の“異人”が、ある時忽然と姿を消してしまったのです」

そうして促した結果アーケンさんから発された言葉は、俺の、“ヘイル”の孤独を意味していたのだった。

## 第9話 “異人”の存在（後書き）

最近三人称で書けば良かったと後悔中。ヘイル視点だと書けないシーンが出てきまして、はい。

三人称で書き直したいけど、それやると今までお気に入りに入れてくれた方に失礼な気も。

なのでもしかしたらArcadia様の方に三人称版を投下するかもです。来年ぐらいに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7380s/>

---

英雄の帰還

2011年10月8日21時05分発行